

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと 風

第156号（2019年5月）

風に吹かれて（133）

白井啓治

・平成の時の中に癌の奴目も捨てて令和に入る
平成の後始末は平成のうちにと、今年の初めに
見つかった上顎洞癌の治療もひと段落したことを
受けて、もう少し入院しても良いのじゃないか
な、との主治医の意見を聞かず何とか病院から脱
出してきた。忌まわしき癌の痕跡を残さず全て平
成の時にうち捨ててきたつもりで退院だったが、
気分的な安堵感とは別に日常生活の行動の体力消
費の大きさに驚いてしまった。

化学療法と放射線療法の副作用で、もともと瘦
せ男だったのに十キロ少し痩せたものだから、何
をするにも息切れである。入院中は、少し遠くに
行く時には看護師が車椅子で連れて行ってくださ
るので体力の極端な減少を意識することがなかった
しかし、家に帰ってみると日常の動作の何と激し
いことかと驚かされた。

半ば渋々の様子で四月末日の退院を主治医から
取り付けてからの毎日の時の進みの遅いことに苛
立ちながら、ふと出所を待つ囚人のことが思われ
た。刑期満了を一週間に控えた囚人などは、今退
院の日を待つ自分と同じような感覚なのだろうな
と。

ここから出た世界は無限大に自由で自在な世界
だと空想してしまう。しかし考えてみれば、制約
だらけの日常に嫌気がさして、あるいは途方もな
い一獲千金を妄想して詰まらぬ犯罪を引き起こし
てきたのであったが、それらのことをすっかりと
忘れてしまい、この塙の中から出られるというこ
とだけで、無限大の自由自在が得られると錯覚し
てしまうのであろう。

退院を待つ入院患者もそうである。病の苦痛が
なくなるともう病棟という狭い世界が何とも鬱陶
しくて堪らない。こんな非人間的な檻のような病
室に思えてくるのだから、何とも勝手な話であ
る。

退院時に憎つき癌の奴めらなど、全て平成の
時の中に捨ててやるとして家に戻ったのはいいが、
治療の副作用の奴確りと付いてきてしまった。放
射線照射の副作用として、舌に大きな口内炎が出
来、小さくはなったが未だに痛みが残っている。

それに加え顎のまわりの筋肉が硬化してしまい十
分な口が開けないのである。十分な口が明けられ
ないと、十分な食事がとれない。当然体力の回復
も進まない。まだまだ暫くは、憎き癌の奴めの後
遺症と戦わねばならない。

ヤレヤレなことである。

さて今月五月号で、当会報も満十二年となった。
20ページから24ページの会報を月一回発行して
きたのだから、なかなか大したものであると自画
自賛を含めて思っている。

先日、知り合いたちがやっていた「街から」と
いう所謂業界人達が編集する冊子のグッドバイ号
が送られてきた。文字離れた現代人を嘆くかの
ような記事もあったが、もともとみんなが文章を
読むなどと言うことはなかった。新聞も目を通す
程度にしか見ていない。

小生はこう思っている。元来読書人とは、ごく
一部の少数派である、と。ただ、読まないけれど
今よりは、これ面白そうだから読んでみようかな
という人は、今よりもだいぶ多かったように思う。

13年続けてきたが、読者が増えてくれたら嬉し
いとは思ったが、増えることは期待してこなかつ
た。現在550部の発行であるが、7〜80人の読者
がいてくれたら万々歳だろうという思いが強かつ
た。お陰で、会員になってくれた人たちは毎月欠
かすことなく書き続けてくれている。

何度も書いたが、これって「見上げたもんだよ
屋根屋の禪」である。会員は、みな高齢者となつ
たが、書き続けられる間は書き続けていこうと思
っている。

地味な会報ではあるが、継続していると、時折
バックナンバーは有りませんか、などの電話を頂
いたりする。読んで何かしら感じてくださってい
るのであろう。こうした読者がいる以上、もう止
めたは決して口にすまいと思っている。

令和の第一号として、もう少し希望の話しをと
思ったが、退院ほやほやの身では、余り思いつく
こともない。令和が愉快な世であることを願うば
かりである。

「走り」の分析

菅原茂美

ホモ・サピエンスは、アフリカを出、異常とも思える好奇心に後押しされ、世界の隅々まで進出を果たした。今や人類の未到地はないくらいだ：と私は書き、5年ほど前【遙かなる旅路】と題し、「風」の会から単行本を出版（街角情報センター等で販売）した。ところが、昨年、イギリスの医師が全く同じ題名・殆ど同じ内容の著作を、邦訳でも出版し、偶然のなせる業に、しみじみ驚いた。そこで「韋駄天」に因み「走り」の分析。

ところが今度は、人類の祖先は、アフリカの発祥地、赤道直下の森林を出て、疎林のサヴァンナに進出。ネコ科の猛獣の絶好の餌食。いかにして逃げ回り、走り回ったかを、私は、ここ10年近く書き続けている。黎明期の人類の祖先は身長85cm、体重30kg。猛獣から見れば正にタナボタ。人類は、700万年かけて身長は1.7m、体重は50kg伸びた。従って地上は毎日が修羅場。枝分かれした頃の元祖は、足が伸び、猛獣から逃げ切った者のみが子孫を残す事ができた。勿論競馬用語の、キャンター（緩い駆け足）ではない。4つ足による、ギャロップ（一足毎に4足が地面を離れる）であつたらう。足が長くなる事が人類の夢であつた筈。それが今日のモデルさんに繋がる。

しかし、よく考えてみると、サヴァンナで背が高い事は、こちらからすれば敵を発見し易いが、逆に敵から見ても、こちらを一早く発見し易い。そのような長足は利点も多いが、ハイリスクも存在。そんな最中、偶然にも、現在私が最も尊敬している科学雑誌「日経サイエンス」が、全く同じ話題を取り上げ、人類の「四足走行」の分析をしているのには全く驚かされた。偶然の一致という

事は、結構この世に存在する事を重ねて知らされ、今回は、いつも心に掛っていた人類の「走り」について、触れてみたい。

今から700万年前、人類の祖先は、チンパンジーとの共通祖先から枝分かれして、直立二足歩行（一部4足時に3足）で真に不安定な変わり者に変遷した。4つ足歩行なら実に安定。普通4つ足歩行の動物は、前足が3分の2の体重を支え、後ろ足はもっぱら推進力として機能する。

それが3分の2の体重を支えていた前足は、空中にぶら下がり、移動のための推進力については、何の役にも立たない選択を、人類はなぜしたか？ 真に不可思議。後ろ足の負担が大きすぎる。動物なのだから、安定的歩行が、何はさておいて重要な動作であつた筈。

しかし人類の祖先は、危険を冒してまでも、二足歩行という、危険行為をやつてのけた。結果としては空いた前足は、指先を使い、石器や、道具を造つたり、物を加工したり、非常に素晴らしい結果をもたらした。指先の活動は大脳発達の原動力にもなった。子どもがピアノ教室に通い、頭脳が伸びるのと同じ原理である。

そして、ウサイン・ボルト選手は2009年、ついに人類初の100mで9秒58の驚異的世界記録でこの地球を蹴飛ばした。時速、62、6歳。身長196cm、体重94kg。2017年までに、獲得した賞金37億6千万円。彼の後ろ脚は、100kg近い体重を支えた上に、強力な推進力で100mで10秒を切つたのだから、世界中で、又々そういう怪物は現れるに相違ない。

*

動物のスピードで、いつも話題になるのは、チーターである。陸上で最も早い動物と言われる。

チーターは通常時速120kmで走るといわれる。最高は途中計測だが、2秒間に70mを走つた計測があるから、時速126kmである。時によりチーターも家畜を襲つたために、密猟が行われたが、やつと生存率は上向いてきた。

さて私がチーターを取り上げた理由は、他にもある。直立二足歩行が安定で速く走れるのなら、なぜチーターは4足歩行を続けているのか？ 逆に言うなら、人類は直立二足歩行に拘り、なぜそれを続けているのか。チーターに倣つて、4足歩行が最も安定で、最速なら、人類も4足歩行すればよいではないか。否、普段は二足歩行でも、国際競技など選手権がかかっているのなら、走る時だけでも、4足走行でも違反ではなからうと思うがいかがであろうか。

日本に菅原のような狂気のコーチが現れ、4足で最も適した距離（多分2〜4百m）を走つたら、世界に革命を起こすかもしれない。違反でないなら何でもやつてよいというものでもなからうが（品位の問題）、試してみる価値はあると思う。

これは世界中で唯一、私のオリジナルアイデアかと思つたら、驚き、世界にはすでに先駆者は他にいたらしい。チーターの様に恐るべき背筋力で、恐らくいつの日か、4足走行で駆けまわるランナーが出てくるかもしれない。ボルト選手も真っ青。試す価値は確かにあると思う。

*

人類は直立二足歩行を始めたために、多くのリスクを背負つた。一番酷いのは、「痔疾」。内臓が地面と平行であるならば、起きるはずのない病気が多数ある。痔疾の苦しさなど一言では言えない。「胃下垂」だって直立していなければ起きるはずはない。教え上げたらきりがなが「脳貧血」

「立ち眩(くら)み」その他、血圧に関する多くのトラブル。膝にかかる重圧。4足歩行なら4本の膝が均等に体重を分担するはずが、前足がサポートするために、後ろ足にかかる負担が多すぎる。一方、尾の助力もあり、カンガルーほどの後ろ足を持つているのなら、前足はどうでもよかるうが。しかし人類は、膝関節痛が多すぎる。同じく腰痛。直立したために上半身の体重が全て、あのか細い腰に集中する。首痛に、背筋痛。とにかく直立したからには、直立するに値する何らかの見返りが、起きる筈なので、それが返ってこなければ、真にアンバランス。

そこで直立の利点を挙げれば、まず第一は、手足(手)の自由化。大脳の進化。ピアノは、眼で楽譜を読み、運動神経を通じ指先に正確に鍵盤を叩くよう指令を出す。指先は正確に、物理的音量だけではなく、感情も籠めて、キーを叩く。女性。ピアノストなら、長い黒髪を整えたりなどして、ムードを盛り上げる。楽譜通りキーを叩くだけならAI(人工頭脳)で十分。とにかく、私は音楽は殆ど無知だが、大きなキャバレーで真つ白のドレスで真つ黒のグラインドピアノを全身に力を籠め、カクテル光線の中で演奏するあの姿には、一目惚れでカクタンと来る。ピアノの音響は、ピアノというフィジカルが奏でる音波ではなく、ピアノストの狂気に満ちたメンタルである。私はピアノの迫力にもものすごく心を奪われた時代があったが、今はただの音痴の爺さん。

*

さて人類は、直立二足歩行をするようになって、何がどう変わったか。類人猿(尾がない)とは何か? それは解剖学的に、化石に残っている物と、DNAに遺っているものと思われる。類人

猿の特徴を調べればよくわかるが、類人猿とは、霊長類(サル目)の中の、猩々(シウウジョウ)亜科の別称である。ヒトに最も近い近縁で、大型ではゴリラ、ボノボ、チンパンジー、オランウータンに、小型の数種のテナガザルを言う。そのうちの、チンパンジーとの共通祖先である類人猿から、直立二足歩行する一種が独立し、ヒト科が生まれた。即ち直立二足歩行する類人猿をもって、「ヒト」とした。その解剖学的特徴は、直立二足歩行するので、頭部は脊柱の真上に位置し、当然、頭骸骨底には、脊柱(脊髄)に繋がる、「大後頭孔」が真ん中にある。もし四つ足歩行なら、首は脊柱の前にぶら下がっているわけなので、大後頭孔は、頭蓋骨底の後ろ側に空いている。之が見分けの基本になっている。更に若干加えると眼上の隆起は大きな特徴である。更におでこの隆起、歯並びは、類人猿はその左右が平行。人類はU字型↓V字型の感じ。類人猿の犬歯は他の臼歯より大きいなどの特徴がある。又直立したために、腰骨が幅広く大きい。なお、手足の細かい骨には、多くの些細な変化がある。

更にDNAレベルでは、先ず染色体数が他の類人猿では24対(つい)48個に対し人類は23対46個である。それゆえ、類人猿とヒトとの雑種はできないが、700万年前、チンパンジーと別れた直後、1200万年ぐらいは両者間には、雑種は生じていたようである。

さて、骨格の大きな変化など少なく、DNAの変化も3%足らずである。ならば人類がいい気になって、地球環境を汚染などしている間に他の類人猿達に革命が起き、人類をしのぐ動物が、現れはしないか? 奢れる者久しからず。ありえない話ではなからう。どんな動物が、どんな姿をして

。明確な特徴は、頭蓋骨底の大後頭孔ぐらいの物なので、果たして人類はいつまでも、万物の霊長として君臨できるかが私の悩みの種。いつの日か人類は己の驕りから滅びる日が来るような気がしてならない。次に天下を取るの誰か? それは想像にお任せしよう。

ちっぽけな哺乳類なのに、現在地上の王者として君臨している人類。その生い立ちを考えたらスタート地点では、見るも哀れな貧弱なものであったに違いない。そもそも今から2億2千万年前(三畳紀)、爬虫類の恐竜全盛時代、その陰で今のネズミぐらいの大きさで、夜間チョロチョロ行動。夜行性だから、哺乳類は基本的には「色盲」が基本。その哺乳類から、こともあろうに直立二足歩行する怪物、「ヒト」が生まれた。

そしてついには、水や地下に潜り、道具を使って陸上を駆け巡り、遂には空中までも自由気ままに飛び回っている。発祥時にそんな事考えもつかなかったことであろう。そんな大変化が起きるのだから、長い目で見たら今後、どんな者が我々にとって代わるかもしれない。

さて、全盛を誇っていた恐竜も、なんと今から6千550万年前、メキシコの中米ユカタン半島に、直径10kmの巨大隕石が、地球に衝突してきた。直径160キロメートルのクレーター(チユチュラブ)が厳然として存在する。その為、地上の多くの生物が滅亡した。特にあの巨大な恐竜の最後は見るに忍びない。他人の不幸をお陰様で...と言っては失礼だが、霊長類は、そのおかげで、急激な発展の場を与えられた。霊長類はモグラなど、食虫目からの分岐である。それから類人猿の急激な発展は、見上げた物。その後、オランウータンは、1400万年前、ゴリラは1000万年

前、我らの共通祖先と枝分かれしている。オランウータンとゴリラは、ものすごく濃厚な動物で、特にゴリラの語り草に、動物園でゴリラの柵（さく）内に人間の子供が落ちた時、雌ゴリラは雄ゴリラを追い払い、人間の子供を抱きかかえ、飼育員に手渡した物語は有名である。とにかくゴリラは姿に似ず、超紳士社会である。私に言わせれば、人類は道徳を学ぶために、青年期には、必ずゴリラ社会に修行（飼育員）に出すなど、如何なものであろうか。

半面、チンパンジーは、人類と同じで、かなり、獐猛な動物である。簡単に仲間同士殺し合いをする。チンパンジーは子どもを殺して食べる事もある。人類と甲乙つけがたい獐猛さである。

とにかく地球の将来を考えたら、核兵器など超野蛮な兵器を持ったり、大量殺戮に現を抜かず人類とチンパンジーは、地球のリーダーの資格はない。願わくば、ゴリラに王者になってほしい。要するにしみじみ反省がないのであれば、人類に地球のリーダーになってほしくはない。

現状の人類の行動を見れば、この星の主人公には真にふさわしくない。雌性遺伝子の萎縮など、折角人類の雄は滅びつつある諸現象が見えるのであるから、人類は雄のいない雌だけで「雌性生殖」する、元の「クローン」社会が適切かと思う。雄がいるから戦争が止まない。まさか雄がいなくなれば、変わって雌が戦争する社会には逆戻りしまいと思う。卵巣ホルモンに殺し合いの本能はないものと信じ込んでいる。バカな事を連発するようだが、私はかなり本気である。

*

植物と違い動物は自由な行動ができるから幸せである。どんな権力を持つ社会が存在するか知れ

ないが、人間が人間の権力で人間の行動を制限する「刑務所」などというものは、誠に不自然な代物である。犯罪者なら何か別の罰則があつてしかるべきと考えるがいかかであろうか？

中国はノーベル平和賞受賞に当たり、「犯罪者を表彰するノーベル賞など碌なものではない」として、妻にさえ代理受賞に行かせなかった。自由・民主主義、言論の自由、人権尊重など、人間の基本的な権利まで制限してはいけない。

自由行動ができるから動物は幸せ。体制を批判し、言論の自由を唱えただけで、刑務所では、地球の王者の資格はない。国連とはこんな野蛮な国を正常化する義務がある。独裁主義で国民が自由を奪われるほど低レベルの政治はない。

言論だけではなく、人間の自由な行動を確保したうえで、真の平和は訪れる。強い希望があるのなら、四足歩行による競技も、スポーツではないか。レスリングやラグビーと何ら変わる所はないと考える。別に現在権力により四足歩行が否定されているわけではなからうが、希望があるのなら四足歩行も結構ではないか？

●文明の進化速度はこれで良いのか？

結論…よろしくない。スポーツはともかく、こんなに早く走る事に何もかも専念すれば、エネルギーの無駄遣いで、環境汚染が進むばかり。

私は現在のゴリラの文化進行速度で丁度よいとさえ思っている。地上どころか、「神聖なる宇宙」までもゴミだらけ。宇宙船に何か破片が当たってくれば、弾丸以上の威力がある。今のところ大事故は起きていないが、そのうち必ず起きる。

膨大な経費を駆使して宇宙開発は進んでおり、国際的な観測など協力体制で進んでいるが、何か事故が起きれば観測など協力網にひびが入る。

宇宙開発と並び、人類の便宜のために国際協力の名のもとに社会は進化を続けているが、何もそんなに急ぐ必要はない。色々なシステムを稼働させる為に、学術・政治・経済など、衛星を通じて電波監視されているが、それをサイバー攻撃して秘密を盗んだり攪乱を起したり、スパイ活動も盛んである。何もかにも、例えばキャッシュレス・代理通貨など、あまり便利過ぎる必要はない。国際経済はもつとゆくり進行すればよい。時速300キロの新幹線では遅いから、500kmのリニアモーターカーという発想はいかなものかといつも思う。東京く名古屋間が例えば50分短縮したからと言ってそれがなんだというの。中国に真似されないものを造る必要はあるが、国際ルールで知財盗用をきつく取り締まれば、何とかなるであろう。

人類が生き延びる目的は、安全に、現代人の遺伝子を次世代に継承させる事にあると思うが、国際組織が強気に働き、曲がった進行を真つすぐ展開させる国際規範が一層重要である。とにかく、国連というものは、出資額の多寡にかかわらず、全く世界共通・平等で、全人類が理想とするすべての者が、心の故郷にならなければならない…と強く信じる。



【石岡市内の社寺紹介】 清涼寺

清涼寺は石岡の中町商店街の丁子屋の先を右に曲がったところにある。隣は国府公園が広がっている。通り入口の看板には「清涼禅寺」とある。寺の名前は「清涼寺」と間違えやすいが、涼の字は「涼」が正解だ。私も以前書いた記事などでは何度も間違ってしまった。お詫びします。



この府中の町や寺院は天正18年(1590年)に大掾氏が佐竹氏に攻められ府中城が消失したときに、そのほとんどが消失した。清涼寺の歴史は大掾高幹が元徳2年(1330年)に尼寺が原(今の府中小学校横の国分尼寺の付近)に建立したものを文明12年(1480年)ごろ現在の地に移したものである。府中城落城(1590年)にて焼失したが、その後府中城主となった佐竹(南)義尚が菩提寺として文禄元年(1592年)に再建したという。

佐竹氏が秋田に転封となったとき(1602年)、南義尚も秋田の湯沢に移った。そして清涼寺も

義尚とともに湯沢に移され(湯沢山清涼寺)、秋田の佐竹南家の菩提寺として現在まで続いている。しかしこの地の清涼寺も、ここ石岡にも佐竹氏の面影の残る寺として残った。佐竹氏の家紋である「月丸扇(日の丸扇)」が見られる。現在清涼寺は曹洞宗の禅寺で「興国山清涼寺」という。写真の本堂は少し前のもので、その後、開山500年を記念して建て直されている。文亀元年曹洞宗に改宗して、大本山永平寺開山道元禅師十六世法孫寒室永旭大和尚を請して清涼寺開山とした。

山門に「市中禅林」の扁額が掲げられているが、これは昔地方の雲水(修行僧)が集まって修行した僧堂をあらわしている。

清涼寺の横、裏手は沢山の墓が置かれており、旧府中藩の所縁のものも多く置かれている。「府中藩最後の家老岡部為綱の墓」がある。

手塚良運の墓

手塚治虫の漫画に「陽ひだまりの樹」があるが、この話には常陸府中藩(石岡)の下級藩士「伊武谷万次郎」と江戸の小石川にあった常陸府中(播磨守)の藩邸の漢方医師「手塚良庵」が出てくる。手塚良庵は大坂の適塾で西洋医学を学ぶが、この時の様子が、一緒に適塾で学んでいた先輩であった福沢諭吉の「福翁自伝」書かれている。手塚治虫はこの福翁自伝を読んで自分の先祖の姿を知り、調査してこのマンガを書いたと思われる。さて、この清涼寺には手塚良運という人の墓がある。この人は手塚治虫の先祖である常陸府中藩の藩医手塚良庵のいとこに当たる。江戸小石川で手塚治虫の曾祖父である藩医良庵の二代前から代々手塚良仙と

いう名を継いできており、府中藩の藩医を継承していた。そのため家系は医者が多く、良庵の父(二代目良仙)の弟も小石川で医者を開業(分家)していた。その子供が手塚良運で、やはり医者を継いでいた。手塚良庵とは従兄弟となる。

この手塚良運は明治の廃藩置県(1871年)で江戸を引き払って、石岡の鹿の子にあった武家屋敷に移住したが、1883年に45歳で死亡し、ここに良運の墓が立てられた。

さて、ここまでは私がまとめた「石岡歴史の散歩道」の第三巻に書いた内容であるが、ここ2年ほど各地の仏像を本などで調べたりしている。この中で「清涼寺式仏像」と呼ばれる釈迦如来像があり、独特のスタイルを持つています。釈迦如来立像などもこの清涼寺式スタイルは独特で、見ればすぐに分かる。像の下部の法衣が足にびったりとまつわりついたようになっていて、両足の境目が法衣の上からわかるのです。京都嵯峨にある清涼寺(通称嵯峨釈迦堂)の釈迦如来立像の話をし少しも解いてみましょう。この像は、お釈迦さまの37歳の時の生身の姿を現した像といわれ、インド、中国、日本と伝わった「三国伝来の釈迦像」といわれるものです。インドで紀元前500年?に生まれた「お釈迦さま(ゴータマ・シッダールタ)」は6年間苦行を続けて、35歳で悟りを開き、それ以降「釈迦」と呼ばれます。悟りを開いた後もさらに一週間ほど瞑想を続け、その後同じ修行仲間5人のところに行って説法行い彼らは釈迦の弟子になります。37歳の釈迦というのは、それから説法を行っていつて弟子が増え始めた

ころのお釈迦さまの姿なのです。



これが「生身」の釈迦像というのにもわけがあります。実はこの「三国伝来の釈迦像」の体内からとんでもないものが見つかったのです。

この釈迦像の体内から絹で作られた五臓六腑（心・ぞうろつぷ・心臓・肝臓などの五臓と小腸・胃など六腑）の模型が納められていたのです。要は生きているお釈迦さまを表しているというものです。平安時代末期から鎌倉時代にかけて、この釈迦像を模した清涼寺式仏像が各地で作られますが、これには戒律を重要視していた真言律宗の叡尊（えいそん）や忍性（にんじょう）などの影響が大きくかかわっていたようです。鎌倉時代に、忍性はこの常陸の国にもやって来ました。つくばの小田氏の館に滞在して筑波山の麓に「極楽寺」という大きな寺を建てています。現在この寺はなくなっています。しかし、大きな五輪塔などが残されており、最近人気の宝篋山（ほうきょうざん）の登山コースにその名前が残されています。こちらの石岡の清涼寺に、この清涼寺式仏像が残されているかどうかは確認できていませんが、忍性が運んで

きたとも言われるこの清涼寺式仏像が、通称穴寺といわれる鉾田市の福泉寺に安置されています。機会があれば是非拝顔したいと思つています。ただし、この像も県指定の文化財であり、お釈迦様の命日の4月8日のみの開帳となっています。また、石岡でもこのような文化財を是非公開して紹介することもやって欲しいものです。かすみがうら市では毎年秋、笠間市では2年に1度秋の一般公開が行われています。

我が労音史（7）

木下明男

20代に参加した労音運動は、1970年からは労音の中心活動家として参加しています。そして、労音改革の責任者の一翼を担う様になり、実践の中から学んだ内容を記述していきます。

1976年の社会情勢と音楽状況

この年の2月ロッキード事件（アメリカの上院外交委員会でロッキード社による違法政治献金問題）が発覚し、5月に国会で調査委員会が設置され、7月に田中角栄前首相が逮捕される、政・官・財を揺るがす大疑獄事件に発展。判事補鬼頭の職権乱用で、権力の企てる謀略と陰謀が露呈された。（公党である共産党委員長の前在監記録を不当に写し取った事実、検事総長の名を語って三木首相にロッキード事件捜査に「指揮権発動を促す偽電話」をする）6月には河野洋平等6人が自民党を離党し新自由クラブを結成、その後の総選挙で自民党が大敗し過半数を割る。11月に政府は毎年の防衛費をGDP1%以内にすることを決めた。中国の周恩来が1月に、毛沢東が9月に死去、

10月には4人組のクーデターが未遂に終わり、江青等が逮捕され華国鋒が首相に就任、中国社会を混乱に落とし込んだ「プロレタリア文化大革命」も終焉した。5月には欧州共産党・労働者党会議が開催され“社会主義への多様な道”を認める最終文章を採択した。アメリカの侵略から全土を解放したベトナムは7月に社会主義共和国として正式に発足、カンボジアではポルポトが政権を掌握。大木正夫の交響曲「ベトナム」が日本フィルで再演、新交響楽団が創立20周年記念に「日本の交響作品展（昭和8年〜18年）」平尾貴四男・蓑作秋吉・大木正夫・尾崎尚忠・早坂文雄・清瀬保一・安部幸明・高田三郎・諸井三郎・伊福部昭を企画発表した。二期会がオペラ研修所を開設。日本ビクターがEBSビデオを発売、ベーター方式は衰退していく。歌手のポールロブソン・藤原義江、指揮者の「マルティノン、作曲家のブリッティンが逝去。

1976年の労音の動き

二ヶ年計画（第24回総会）の二年目にあたるこの年は「3万名の東京労音建設」で取り組んだ。一年目の会員数は平均2万名だったが、地域ごとの最大会員数を集計すると3万名を超過し、同時にサークル数も2500サークルになり、委員数も増えて労音運動の力量向上が見られた。例会活動では、地域例会の3年に渡る活動を総括し、例会活動が極めて困難な状況で、地域例会は殆ど成功していることから見て、重要な教訓として確認した。この年の総会記念音楽祭でも、トップギヤラン・ふくやまゆきお・高岡良樹などが出演して、地域例会のための内容を試演した。この年の地域例会は、全地域が取り組み種目もオーケストラ・ポップ

ス・ジャズ・クラシック・寄席等々、これまで以上に幅広い内容を、各地域・サークルの独自性・創意性を生かし、手作り例会が実施され、46例会1万9千人が組織された。

二ヶ年計画の結果は、第一年度は2万5千名を達成（月平均では2万名超）第二年度3月には、2万9千名を達成し目標まであと一歩にまで迫る。特徴は「森の歌」「第九」の合唱例会で、大量の合唱団を組織し、その力で例会を成功させた。具体的には、「森の歌」の合唱団は800名で3例会600名をを抜き10月2万3千、11月2万5千、12月2万3千5百と3ヶ月連続で2万を越す拡大に成功、12月の「第九」では3例会満席で成功させる。

この年のクラシック例会では、53種目63例会で最多の種目・例会を記録した、海外からの演奏家（団体）は28種目となり全体の半数を占めた。大型演奏団体は「赤軍合唱団」・モスクワ音楽劇場バレエ・レニングラードバレエ・チェコフィル等を実現したが、国内のオーケストラ例会はうまくいかなかった。

ポピュラー例会では、「10種目13例会」を実現、特に布施明9回沢田研二3回の例会は、歌唱力と構成が優れて好評で、新しい会員の増加になる。上田正樹とサウストウや長谷川きよしとダウンタウンは充実した内容で楽しめる例会として好評を博す、芸術大賞を受けた渡辺貞夫例会は秀逸の内容だった。また長谷川きよし・山崎ハコ・因幡晃の小ホールコンサートは高い評価で大きな話題を広げ、良い意味で問題提起となった。ポピュラー全体として若年層の期待に応える企画は増えたが、岸洋子・菅原洋一・伊東ゆかりなどベテラン歌手のコンサートが減少し例会評価も問題点が残る、

事前に会員やサークルに例会内容を伝えられなかったことが原因のようだった。

伝統音楽・芸能の例会では、落語独演会をはじめ、能・狂言・歌舞伎・邦楽・新内・地唄舞など、例年より多くの種目を取り上げ、各分野で一流であったことが定評を得た。特に小ホールでの落語独演会方式は評判を呼び、邦楽面では演奏サークルとふきの会の例会は、演奏サークルと専門家集団という新しい例会づくりが成功し注目を得た。

今年初めに開催された第2回全国労音交流集會は山陰の松江に、全国から800名の活動家が集まり「良い音楽の鑑賞と普及を中心としたサークル活動」をテーマに経験交流し学びあった。記念公演に作曲家の林光を迎え「今音楽家にできることは何か？」を聞く。

例会外の活動として、冬の友好祭は志賀高原で高石智也を迎え800名で盛り上がり、夏の友好祭は富士五湖西湖の紅葉台に1000名が集まり交流を深める。秋の第22回全国会議では、労音会館に1000名が集まり「新基本任務」実践の中で、労音運動を曖昧にする傾向、興業化の傾向、サークル活動軽視の傾向などが起きていることに討議を深め、労音運動は「サークルを基礎とした民主的・大衆的な音楽鑑賞運動である」ことを再確認する。そして共同企画を増やして全国の連帯を深めていくことを確認する。希望の強いポピュラー例会では、森田公一とトップギャランにゲストとして中尾ミエや太田裕美の企画、リサイタルでは、布施明・風・イルカ・森山良子・チェリッシュ・因幡晃・加藤登紀子・沢田研二・荒井由実・野口五郎・長谷川きよし・NSP・梓みちよ・アリス・ハイファイセット・デュークなどが挙げられた。記念講演では、伊藤強（音楽評論家）が「日

本ポピュラー音楽界の現状」の題で、1980年代からテレビ局がヒット曲の原盤と出版権の楽譜出版社をつくり、利益追求に乗り出している現状を分析し、日本の歌謡曲がマスメディアの従属物になり、大衆の要求から離反していることを強調、そうして現在労音の役割が大切になっていると指摘。

1985年の私

東京労音副委員長に就任して4年目、全国や近県労音の諸会議にも多数参加し、議事を進めたり東京の代表報告をしたり、また東京での労音活動の中心活動家として、先頭に立って活動を推進していた。ニコンの職場では会社側経営者による組合弱体政策（組合の分裂）が定着し、賃金差別や仕事の差別などにより、自由に物が言えない暗い職場に成りつつあった。そんな中で労音サークルを中心とした、「いこい」サークルは第一組合第二組合の差別がない、自由に自主的に活動ができるサークルとして、数十名の若者を集めスキーバスやサイクリング、飲み会・・・等々盛んに活動が展開された時期でもあった。

地域活動も地域例会等で出演者との創作を交えた例会作りが盛んに行われるようになった。（紙風船など）11月には、税金争議解決（入場税の滞納）のため沖縄県に元事務局跡地（信濃町）売却契約のために、返却されたばかりの沖縄に派遣された。諸活動を推進するため、横須賀からの通勤は限界に達していたので、東京に住居を探していたが、スキー友好祭で知り合った志賀高原の望山荘（本館）の子息から蒲田の家を購入することが決まったのも此の頃でした。

32歳で、職場でも労音でも最大に活躍できた、最も充実した時期でした。翌年には初の外国派遣

(米国に勝利したベトナム労音派遣団)にも、全国の団長として行くことが決まったのもこの年です。



つづく

石岡市指定文化財(十二)

兼平智恵子

新しい元号「令和」の幕開けと共に、石岡市ふるさと歴史館においても新しい企画展が開催されました。

「長峰塾—教育で作る新時代—」、日本史の転換点・明治維新で活躍した鈴木銀四郎と長峰塾が取り上げられています。

銀四郎は石岡市内井関地区の出身で教育面から石岡の近代化を支えた一人で、幼少から学問に励み、私塾で教鞭を振るい、明治維新後は、公立小学校の設置に尽力するなど地域に教育を根付かせる土壌を作りました。

現在二〇二〇年に向けて教育の改革が進められ、その背景には、AI技術の発展などの急激な社会変化があり、教育の在り方を見直すことが必要となっています。今回の企画展では激動の時代にどのような意欲で教育制度が整備されたのかを紹介し、同じ時代の転換点に生きる私たちは何のために学ぶか、それを考えるきっかけになるようお願いが込められています。

参考資料 石岡市ふるさと歴史館第一八回企画展

開館時間：午前十時から午後四時半、休館日：毎週月曜

日(祝日の場合は翌日)、入場無料、電話：0299・

23・2398、交通：JR常磐線石岡駅西口より徒歩

約十二分、駐車場あり。

お待ちしております。

本題の石岡市指定文化財の紹介に入ります。

鰐口 国府五十三(北向観音堂内)

有形(工芸品)

昭和五三・九・十一指定

鰐口は北向観音堂(この観音堂につきましては、当会報、先月一五五号にて、風の会、木村進会員が紹介しています)の軒下にかけて行われていました。

前にたらし綱を引いて祈願の為に打ち鳴らす我が国独特の青銅製・鉄製の鳴器である。(現在は鈴がかけられている)

現存する最古の銘のあるものは長保三年(一〇〇二)のものであるが、この鰐口は天仁年間(一一〇八)の銘があったといわれ、本県では最古のものとして

町内の方にお聞きしましたところ一度盗難に合い無事に戻りましたがそれ以後、現在では町内の方が大切に保管なされているとのことでした。確りとした施設の中で、貴重な文化財が皆さんの目に触れることが出来るように望むばかりでした。

ちよつと調べてみました。
神社に付属して建てられた寺院を神宮寺といい、神社に所属する僧侶は社僧といわれ、神前で読経をしたという。

石岡市の總社宮にも付属寺院があった時代があり、江戸時代につくられた石岡市の様子を記した資料の『府中雜記』によりまずと「神宮寺は元惣

社明神の地中、天大神門外の西のくぼみにあり、明神唯一御取立につき元禄年中富田町東裏に移す。今神宮寺跡と云う。その後今の地に移る。同観音堂も其時今の地造立也」

果たして今の總社宮境内のどの辺に？神宮寺があったのか宮司さんに伺いましたら長い、参道を後にして、随神門に向かうこと直角に曲がり、右側一帯、現在は、数個の山車小屋がある辺りと言っておられた。

また確固たる神宮寺の跡と証明していた、神宮寺橋の石の欄干が移されてしまったことは本当に本当に残念でなりません。

北向観音堂をガイド案内の時は、誇らしげに説明していました。

また町内の方は懐かしくお話してくれました、十六、十七歳の頃、神宮寺橋の下を流れる川で泳いだものだど、エー???川が流れていたなんて、今は下水道になつてるよ!でした。

勿論もう片方の欄干もあり、それはたしか地下に埋められたのではと。のどかな良き時代を描くように話して下さいました。

因みに神宮寺橋は昭和三年竣工と刻まれています。富田町に移されてから大部、後になって造られたものだったとは意外でした。

参考資料 今なせ石岡・歴史 府中塾

○花ちらし野山はみどりの競演 智恵子

桜花 はな 伊東弓子

今年は桜の花が長い間咲いていた。一ヶ月というと言ひ過ぎかもしれないが、今尚、ぼたん桜、

芝桜が空間をうめ、地上を飾っている。
桜というと、父がよく唱ったあの歌を思い出す。

“ 貴様と俺とは 同期の桜
同じ兵学校の 庭に咲く
咲いた花なら 散るのは覚悟
見事散りましょう 国のため ”

二等兵、それも終戦間際の一年半、悲惨な出来事、苦勞はどんなだっただろう。お酒が入ってほろ酔い気分が進むにつれ、箸でお膳を叩きながら、手で拍子をとりながら唱う。その声の奥、喉の奥に何か悶った物があつたのだろう。それを吐出すかのように大きくなり、胸に支えた物を押し出したいように強くなったりする。流れてくる涙を拭うことなく続いた。

夫もそうであつた。戦争を推し進めていた日本の中で小学生時代を過ごしていた。出兵していく人を布佐の駅で、荒川沖の駅で何人見送つたことかと、話していた。戦争の意味も訳も分からない、大人達と日の丸の国旗を振り、大きな声で軍歌を唱つた日々が何度だったか。

“ 勝ってくるぞと 勇ましく
誓つて国を出たからにや
手柄たてずに帰らりよか ”

中でも桜の花びらが散っているホームで、幼い子供と母親の姿が、強い印象で残っている。と話してくれた。終戦をむかえ、民主主義国家、軍国主義、何故戦争をしたのか知るようになって、自分も罪人の一人ではないかと思ひ、苦しかったという。何も知らなかったとはいへ、誇らしげに唱

つて見送つた人達は、一人として帰つてこなかったと知ると辛かつたし、今もどうしようもなく苦しい。と、涙を流しながら盃を口に運んでいた。辛い経験をした人達がどんどん減つていき、平和と勘違いしてどつぷり浸かっている人が多いことに恐れを感じる。

私が初めて心にとめた桜の印象は、上を見上げて見た花ではなく花びらの桜だった。校庭の西から北側、道路沿いの土手にあつた桜の木の下で花びら摘みをしたことだった。ブランコ、肋木、滑り台、砂場へと移りながら細い籬笹に摘んだり、折針に糸を通して摘んだり競争していった思い出がある。

中学校時代は、植えて間もないので桜の木も細く花もちらほらという程度、六十五年経つた今年何本か切られた。一貫校の校庭配置のため又、虫喰いのひどい木らしい。

土浦に通うようになると世界は広がつた。桜川と堤の桜、学校の桜、朝夕通る亀城公園とても希望に溢れた桜だった。

水戸へ通つた春、広がり大きな世界を作つてくれた。千波湖の桜、病院に続く下市の川辺の桜、すべてが青春という時間の流れの中に友と私を包んでくれていた。この頃は“そめいよしの”といわれる桜が主だった。白い花が一本の木を包むと、うす桃の姿になる。ただ純粹に“きれい”という声が出た。

皇太子さま、美智子さまのお祝いもこの頃だ。後、三、四日でお二人も退位され、新しい年号“令和”となる。

歌の好きな母は、ことあるごとに唱っていた。季節の歌も口遊んでいた。荒城の月も一緒によく唱つた。武士の姿、城を見上げる庶民の姿が目

浮かんでくる。盃を廻し、舞い、唱い、和らぎのひとつときを得ていたろうなど想像した。

山桜の美しさを知つたのは、母親仲間と子供を連れて出かけた時だった。杉の緑の濃い中に若葉の柔かい中に立つて山桜の葉と花が一緒にあるのも自然体で受け入れて見入つた。

「貴女は山桜の美しさね」と、言われたことがあつた。そういう人がいたことも懐かし、その人への思いが厚くなつた一瞬もまた遠く過ぎてしまった。

“花咲翁さん”の話聞かせてやつたあの晩、次男は何んで桜が咲いたのか、灰なんてきたないのにと、不思議がつて次々に問ひかけ、私も即答できなかつた。その後、昔話しや昔語りは人生そのものを教えてくれるものだと思つた。灰はよい肥しだったのだ。

ある会社の道路側の枝が切られてしまった。電線に差し障りないのに何故切られたのか、道路に花びらが落ちてはまずいのか、簡単に切るのなら植えるな。と言いたくなる。木だつて生きるんだ、と代弁してやりたい。工場が出来た六十年前、その後十年も経つて桜が咲き出すと、地域の人達に開放してくれて花見の会をしたり、和気あいあいという雰囲気だった。夜の花見は肌寒さを感じながらもお酒や馳走の舌鼓に、人の心も解かれて輪が出来ていった頃だった。

東北の桜の巨木も見たが、老いてなおも美しい姿に驚くが、人間の姿、形はそうはいかない。せめて心は美しくありたいが、これまたそうはいかないようだ、とこの頃思うことが多い。

花も改良されて彩やかになつた。なりすぎた。人間の多様な要望によつて作られていったものだろう。それも美かと戸惑う。作り替えて、作り替

えていつになつたら満足するのだろう。農地や水田、山林までも大量の花でうめつくしてよいのだろうか。

農免道路の桜はいつ植えられたのかと聞くと、玉里地区の農産物を消費地に運びやすいように造られた道路、当時農業の第一線に立って農産物をつくっていた人達が植えたという、今大木となった。

平山、大井戸は土地が狭く坂が多い。その台地道を造る便宜を図ったYさんは痛々しい戦争を経験したこと平和を願って、親子で陽光桜を植えた。今、花の下を土地の人が、尋ねてくる人があたりまえのように通っている。

その一ヶ所にTさんの暖かい志しで作られている花の道、憩いの悠遊農園からは筑波山も霞ヶ浦も目に入る。

大井戸の堤防の桜も確りと根をはって逞しい木になって釣人の日影をつくっている。Kさんをリーダーに美霞エイトの人達の努力の賜物だ。ごみ拾いをした先駆者たちでもある。

今年花の時期が長かったから沢山の花を見ることが出来た。沖洲、芸術村の花、赤身地蔵尊の縁日の桜、小川小学校が移転してもぬけの殻となった校庭の桜、やすらぎの里の花、文化センター、コスモスの桜、どの桜もその場で確り自分の存在を私達に見せてくれた。花の美しさだけでなく、そこに係わった人やその人達の思いを知って眺めたいものだと、改めて思った。花々も歴史を持っているのだと深く心にとめた。

そんな思いとは裏腹に残念なことを一週間前に聞いた。川中子から高崎までの堤防に、小美玉の区長会で桜の苗を植えた。地元はその後の管理をする事になって、ここ四〜五年続けてきた。

「いや高崎の議員さんら大したもんだ。桜の木植えて活気があつこと。高浜なんちゃ、何にもねえよ」と、高浜のある人の話だった。議員一人をやったことではない、ということをお話しておいた。観光地を追いかけるだけでなく、地元の桜、近隣の桜、身近な花を見つけて一つ一つの美しさに感動したいものだ。

桜の時期が長かったので、十五夜（旧三月十五日）の月と、桜の花が同時に見られるかと楽しみにしていたが、十五夜は雨に流れ、桜の花は暗に包まれて残念だった。一人「花影」の歌を何度も何度も唱っていた。

平成三十一年四月二十九日（月）



東照宮

小林幸枝

日光東照宮はよく聞くけれど、水戸市に東照宮があるとは知らなかった。高校、社会時代に水戸市に通っていたのに知らなかった。水戸市歴史散歩ガイドを読みました。東照宮のイメージは地味だと思ったのですが、派手ですね。日光東照宮のようでした。

元和七年（一六二一年）、家康の十一男で水戸藩の藩祖である頼房が、父の家康を祀るために景勝地の霊松山に創建しました。中央に東照大権現、左に山王権現、右に麻多羅神（唐の青龍寺の鎮守神で、比叡山の鎮守である日吉大神と同神とされる）が祀られ、創建当時は「三所権現」と称していたそうです。元和十年に二代將軍の秀忠の霊屋が立てられ、以後、歴代將軍の霊が相殿として祀られました。鎮座地名は、元禄十二年（一六九九年）、二代藩主光圀によって「常盤山」に改められました。

大照寺が別当寺となり、創建以来仏式で祭祀が行われていたが、天保十四年（一八四四年）、寺院整理を進めていた九代藩主・斉昭によって寺僧は罷免され、神式に改められ、仏教色の強い左右の配神二座が除かれました。江戸幕府の祖、「家康をまつる東照宮」を寺院整理の対象にしたために幕府などの批判を受け、斉昭の隠居の一因になったとされています。

戦前、社殿は旧国室に指定されましたが、昭和二十年（一九四五年）の戦災で焼失、昭和三十七年現在の社殿が造営されました。現在は徳川頼房公も祀られています。

この水戸東照宮には、幕末に、水戸藩第九代藩主、徳川斉昭（なりあき）自らが設計した、日本最古の「戦車」と言われる安神車（あんじんしゃ）が保管されています。安神車の構造は、鉄板で上部と周囲をかこんで、中に一人が入り、中から小銃が発射できるようにしたものです。これを牛が引く車に乗せて動きます。この機会に是非、訪れてみてはいかがでしょうか。

母は食べ物に関しては私の偏食を容認し、好物の茹で小豆をしばしば作ってくれた。幼い時一人にして甘党にするきつかけとなったことへの罪滅ぼしだったのだろうか。

或る時私に、「うちは何を作ってもつまらない。おいしいも不味いも言わないから作っても張り合いが無い。」とこぼした。

私だけが鍋いっぱいの茹で小豆を、うまそうに食べるので、母としては内心嬉しかったのかも知れない。若い母としては貧しいながらも工夫して、少しでもおいしいものを、と苦心したろうに、誰も褒めてくれないのではがっかりだったろう。

春は草餅、夏は水ようかん、秋はおはぎ、冬はきんとん。これは毎年の習慣。農家の人が草餅を売りに来たりもした。

公民館で講習会でもあったのか石油コンロの上にセツトする陶器の蒸し器のようなものを買ってきた。これで「焼きりんご」というものができるのだという。リンゴの芯を取りそこに砂糖を入れ、蒸し気に掛ける。期待したのだが結果はあまり美味くはなかった。1, 2度作っただけでお役ごめんととなった。しばらく台所の隅にあったが、いつのまにかどこかへ行ってしまった。

古い鯛焼き器もあった。カルメ焼き器もあった。飴などの駄菓子を入れるガラスの瓶もあった。網代さんの奥さんに洋裁を習って、そののち家で洋裁の仕事をするようになった。女の人が入れ代わり立ち代わり現れて、サイズを測ったり仮縫いをしたりしていた。

古い足踏みのミシンの回転部に機械油を給油す

るのは私の役目だった。

母と二人きりで東京で映画を見た記憶がある。

いつもなら兄妹三人一緒なのにどうしてかその時だけは二人だけだった。「尼僧ヨアンナ」という映画で子供の私には面白くもない映画だった。その後知ったところでは当時話題となった映画らしい。平成7年1月14日死去、70歳であった。

その前年、吐血したのですぐに市内のかかりつけの「某」病院へ行く。

検査の結果「何でも無い」とのこと、治療はしていない。その際吐しゃ物を新聞紙で包み持参した。診断に役立つと思っただろう。医師からは無視されたという。その夏、古くからの母の知人が訪ねてきたとかで、朝まで話し込んでいた。翌日それを聞いた私は、体調もあまりよくないのに、なぜそんなことをした、と強い口調で責めた。その翌日の出来事である。

私はその以前から言動に異常があり、9月ごろから幾度目かの精神疾患の発症で入院していた。まだ治療中にもかかわらず、突然退院と言われ、訳も分からずに帰宅した。12月も終わりの頃である。

すでに母が重度の黄疸状態で入院しており、見舞いに行った。混乱状態で、ろくに言葉も発しない私を見た母は、

「まだ良くなっていないのね」と淋しげに言った。「部屋の中に通帳があるけど、真理子と分けてちょうだいね」と言った。これが母との最後の会話となった。

正月が明けて数日後、叔父が訪ねてきて、

「サトちゃんは末期がんで、治療手段がない。腹水がたまりそれを抜くとただちに死んでしまう。兔に角病院へ行こう」ということで、その足で病

院へ行った。

腹水がたまり身動きもままならず、酸素マスクをつけた母は、懸命に何か言おうとするのだが聞き取れない。枕元のテーブルを差し示し何事か伝えようとするのだが、わからない。

「うん、わかった」と嘘を言うと、安心したのか目をつぶった。

やがて妹が現れたので帰宅した。翌日妹からの電話で死去を知った。病院へ行くと、妹は帰った後で、病院は早くベッドを空けたいため、「勝手に」出入りの葬儀社に遺体を運ばせた。

松の内も終わらない慌ただしさの中で、何とか葬儀を済ませた。精神状態も満足ではない中、喪主となったわけで近所の方たちにはすっかりお世話になり、いらぬご迷惑をおかけしてしまった。

当番の世話役が言うには、私が留守中、葬儀社がかち合ってしまうというトラブルがあり調整に手間取ったという。

翌々日の通夜の日、自宅二階にいた私と従姉妹たちは時ならぬ強い地震に襲われた。阪神淡路大震災の日である。残されたものを整理しているなかで出てきたのが、件の古い手帳だった。

一連の問診や検査が適切であったか、疑問がのこるところである。前年の夏の時点で病状はかなり進んでいたはずで、わずか3, 4か月で急速にがんが進行したとは思えない。以前から糖尿病を患っていて、しよっちゅう医者には行っていた。また合併症の白内障も患っていて、手術も受けている。

生来の医者嫌いにますます拍車がかかる結果となった。あとになって仕事で知り合った医療関係者にこのことを話すと、「ままだることで責められないよ」とのひとこと。

【風の談話室】

《読者投稿》

やまと暮らし (27)

やまと女

寒さが続いたり、雨が続きたり、そして春を飛ばして夏が・・・？おかしいな・・・

お花見いろいろ・・・

●豊後荘病院前道路の桜が気になって出かけてみた。メイン道路の桜は〇分咲きくらい、週末には満開になりそう？ちようど桜祭りが予定されている。絶好の筑波山眺望ポイントから崖下を見ると、そこにもたくさん桜が咲いています。そしてヤギさん・・・花見のついでにヤギさんにもご挨拶、フェンスに近づくと、1頭2頭と近寄ってくる。子ヤギが〇頭増えていた。広いフェンスの中でのびのび走り廻って楽しそう。

●カフェえんじゅの誘いで、上青柳の大山さくら見学に・・・大山さくらはまだ咲き始めだったが道中の山桜は満開、ヤマブキや椿も咲いていた。

〓年連続の大山さくら見学、一年目満開の桜、昨年咲き終わった桜、今年は咲き始めの桜それぞれ姿が見られた。桜は樹齢250年、野村さんの説明に遠い昔に思いをはせ、想像しながら散策した・・・。

●春らしい装い・・・掃除をしていると、ひつじの郷のマスターがやってきて花見のお誘い、ログハウス前の桜は、ちようど見ごろでその下でパーベキューあいにく予定があり参加できず。暖かい日和なので、この日はそのまま外でお茶を、お土産のお団子を食べながら世間話をしていると、マ

マからお客さんが来ているよとの電話であわてて帰っていった・・・

寒い、寒の戻りかそして暖かい日が・・・

●外に置いたバケツの中で厚めの氷が張っていた。隣のご主人、寒いなあ今朝は2度しかなかったよ、柿とかの花芽やられないかなあ、と叫んでいた。ほんとに寒い、畑には霜が降り真つ白。日中は冷たい風が吹き、桜も足踏み状態かな。この時期樹々の新芽はとでもきれいな、中でも柳の新芽には思わず足を止める。柔らかくて風にしなやかに揺れてとても綺麗です。それにしても寒い。一日冷たい雨でした・・・

●良い季節になってきました。そろそろ田んぼにも水が張られ田植えの季節になります。またカエルの合唱で賑やかになります。それにしても山々のきれいなこと、山桜や若葉で山がフワフワです。優しい山懐につつまれ幸せ気分です。花壇の花もかわいい！

●気温が一気に上がった、桜も見ごろとなり近くでは桜まつりが開催、風に乗ってジャズが流れてきた。一日過ぎるのが早い、ちよこちよここと出かける、夫が会議に出かける(飲む?)そのアッシー女になる、気が付くと西の空にはきれいな夕日が・・・。

山菜、嬉しく楽しく・・・

●ごごみを頂きました。茹でて胡麻和え、みそ味にしました。別の日、わらびを頂きました。灰汁ぬきしてお浸しにしたり、油揚げといためたり、タケノコと煮たりこの季節ならではの味わいです。春がどんどん駆け足でやってきます・・・

●昨夜はひどい雨降り、そして不気味な雷、ひと

雨降るとタケノコもよきよき、我が家のほんの小さな竹藪もこの時期楽しませてくれる。今日は家人に何本か掘ってもらった・・・

●朝起きると、空いっぱい青空が広がる気持ちの良い朝でした。夫の携帯が鳴り、吉川二郎さんが泊まりに来るとの連絡が・・・。早速裏の雑木林へ山菜探し、たくさんタラの芽を採り、それに先日我が家の竹やぶから掘ったタケノコもあり、ほうれん草の胡麻和えも加え、山菜づくしで迎えました。

●一泊して別れた翌日、今度は松戸のみのり台で再会。弟子の野口さんも混じえて鳥料理の店(野口さんの姉の夫)に出かける。様々な鳥料理に舌鼓、最後は大好きなフワフワ親子丼をいただき幸せでした。結婚50年を二郎さんと久子さんに祝っていたたく幸せを感じた。今度は、隣市でピザ屋を経営している友人の店「はなな」に案内しよう・・・。

諸々なこと・・・

●湯袋峠を登っていくと途中に大きなログハウスがある。羊肉レストランひつじの郷でマルシェ開催。年に数回開催されお客さんも増えて・・・店内が手作り品で一杯です。ひつじの郷で開催したマルシェ、さまざまな手作り品、楽しかったです。今度はいちご団地元ベジグリーンで開催するそうです。

●村で只1件になったタバコ農家、〇月に苗床から畑に移植された苗。成長が早いのでどんどん伸びて、5月には花が咲き、葉に栄養が行くように心止め作業、6月には収穫です。何の作業も重労働ですが、この作業も過酷です。人の手による作業ですから・・・

●朝日里山学校、2004年に廃校になった小学校、豊かな自然に囲まれた校舎は10年？程前体験型の施設に変わった。今日は地元の陶芸家による陶芸教室開催のため少しかけお手伝い。大人の親子教室。チャイムが鳴ると、出席を取り元気に朝の歌を歌い一時限目の陶芸の授業、そのあと給食。ほほえましい家族の授業でした。みんなそれぞれの作品が出来上がり1か月後手にするのを楽しみに、また来年の約束をして別れました。

●エコクラフトの日。今日もせっせと手と頭を働かせてあれやこれやと、昨日はラジオから脳の活性化には一日10人の人に会い話をし、最低100の文字を書き、1000の文字を読むといいか流れていた。エコクラフト仲間最年長の方は毎日お風呂の中で九九を唱えているという。みんないろいろ頑張っているんだなあ。エコクラフトも出来上がりを想像しながらみんなで教えあい数時間を過ごす。脳活にはいい時間かも・・・

そして悲しく・・・

●夫の受けた一本の電話「今朝路子が亡くなった・・・」昨年末に路子さんの店(ピッツア屋)に電話すると、長く続く呼び出し音の後・・・。ご主人が暗い声で、路子は長期療養に入っている？帰れるかわからない？電話の向こうの声は沈んでいてこれ以上話したくないという感じが読み取れた。その後、ずっと気になっていたが、怖くてそれ以上踏み込んで聞く事も出来ず4ヶ月も経っていました。

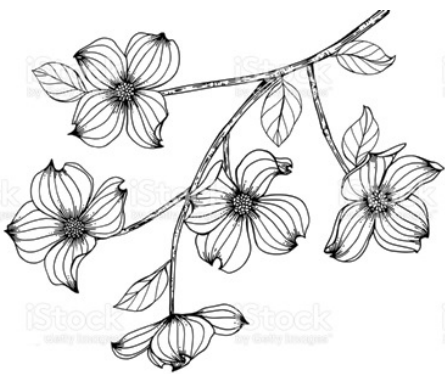
●なんとなく胸騒ぎがして自宅を訪ねると、病院帰りのご主人に会う。まだ路子は入院中(病名は多発性骨髄腫)で、抗がん剤治療をしている。少ししい方向に向いてはいるが、骨密度が薄く其処

此処に骨折の危機が・・・ということだった。連休明けにはいったん退院する方向で家のリフォームも済んだとのこと。

●路子さんご夫妻とは蒲田時代コンサートやイベントなどで顔を合わせた仲間。30年？位前だったか、ご主人の転勤で偶然にも石岡に、そのあと私たちも石岡に居を移し、再び交流が始まった。彼女は長年自分のお店を持ちたいといろいろ勉強していた。

●10年前念願のピザの店を開店した。持ち前の明るさと元氣、そしてピザの美味しさにつられお店はいつもいっぱいだった。交友関係も広くフォークグループのボーカルを担当していた。そんな元氣な路子さんでも病氣には勝てなかった。もしかしたらこれは現実ではないのかもしれない・・・これはただのジョークかもしれない。通夜も告別式もこれからのだから・・・？

●満開のハナミズキ・・・今日は空を仰いで何思う・・・！



《風の眩き》 古代オリエント 打田昇三

時代は急速に変化してゆくから過去は忘れ去られる運命にあり今では古い話になるが、西暦千年・平成十二年はNHKが放送を開始してから七十五年になると言うので、其の記念事業として「世界四大文明フォーラム」が渋谷のNHKホールで開かれた。更に其の全てはテレビで放映されたほかに、東京と横浜の博物館・美術館(四会場)で「世界四大文明展」が開催された。

フォーラムでは、冒頭に昭和天皇の末弟・三笠宮崇仁(たかひと)親王が「日本における古代オリエント文明研究史」と題して特別講演をされた。

此の方は、かつて石岡にも来たことがある様な気がする。理由は不明だが多分、新婚旅行のときでもあったろうか：戦時中是否応なしに軍人にされたが、昭和二十二年から研究生として東大の文学部に入り直し、「古代オリエント文明」の研究を続けて、東京女子大学などの講師・東京芸大の客員教授などを歴任、さらに「中近東文化センター」という研究機関の総裁に据えられていた。

NHKホールでのフォーラムは希望申し込み・抽選なので私は申し込みをして幸いに当選した。田舎の爺さんが東京へ行くのは容易では無いが無事に到着、自由席かぶりつきで第一部の三笠宮特別講演と第二部のパネルディスカッション「文明の潮流・その未来」四大文明に何を学ぶのか」を拝聴してきた。パネリストは、いずれも当時の早稲田大学教授でエジプト文明展学芸員をつとめる吉村作治先生、東京国立博物館西アジア・エジプト室長の後藤健先生、国士館大学教授の松本健先生、東海大学教授の近藤英夫先生、学習院大学

教授の鶴間和幸先生で、高島肇久NHK放送総局特別主幹がコーディネーターを務め、NHKの森田美由紀アナウンサーが司会を担当した。

私は少年時代に上野駅で盗賊に荷物を盗まれたことはあるが、皇族を身近に拝顔したことが無いので緊張したけれども、父親の家系が宮内庁入りの職人であり、父親は大正天皇だか皇太子時代の昭和天皇だかの寝台が壊れたので、其の修理に皇居内奥深くに入ったことがあるらしい…それを思い出して三笠宮のお話に耳を傾けたのである。

内容は文字にすると五万七千字もあり専門的なもので、とても紹介し切れるものではないが、私は其の後で行われた「パネルディスカッション」を含めて全てを録音してから、後に少しずつ文章に直しておいたので貴重な史料になっている。

三笠宮はNHKホールでの八年ぶり講演だと当日のテーマは「日本における古代オリエント文明研究史」であることを先ず述べられた。其れによると、第二次世界大戦の直後から古代オリエント文明を研究して居られたらしい。

「オリエント」の語源について述べられたところに依ると、オリエントとはラテン語で「昇る太陽」又は「東の方」を意味する「オリエンス」に由来するとか。つまり、イタリア半島に住んでいたローマ人から見ると、先ず東にあるギリシア文明を高く評価し尊敬しており「エクスオリエンテ・ルクス」光は東方より」の有名な言葉を残した。ローマ人がギリシア地方を指して呼んだ「オリエンス」が欧州諸国で「オリエント」になり、それが東へ拡大して現代では日本も含まれるらしい。かつて大日本帝国時代に「日出づる国・日本」などと図々しく表現していたが、まんざら誇張でもなかったようである。

早春雑感

菅原茂美



◎水仙「スイセン」

長い冬が過ぎ、待ちに待った早春の草花や樹木がやつと動き出した(4月初旬)。先ず単純だが、私は水仙の花が大好き。天にいる仙人を天仙、水辺の仙人を水仙(スイセン)というそうだ。別名を「雪中花」。ヒガンバナ科の多年草。筒状の花の中心は「副花冠」という。花言葉は自己愛。黄色なら『もう一度愛して』ラッパ状筒なら『尊敬』。原産地スペイン。毒素はアルカロイドのリコリン。日本の植物中毒で最多。花びらの外側3枚はガク、内側3枚が花弁。

さて私は単細胞だから、紅白とか、金銀とか八重一重とか対比し眺めるのが大好き。白い花びらに赤色筒の「口紅」等絶品である。水仙はかれこれ7品種を栽培。水仙には病虫害はないように見えるし、葉に太陽の光が十分に当たれば翌年確実に花が咲く。サクランボ、フクジュソウもまた春待つ心を癒してくれる。

『♪ あなたに抱かれて私は蝶になる…』作詞家とは正に夢追い人。

◎木瓜(ボケ)

早春の花木として木瓜は私の最も好きな花である。特に品種は「東洋錦」。メインは白花なのに所々に赤花が混じる。一つの花でも、白い花弁に赤の花びらが差し込んだりする。バラ科落葉樹。他に八重純白の「銀獅子」と黒に近い強紅「黒竜」。枝に棘があり、モズがバツタなどを刺しておく。早春、葉が出る前に5弁の花が咲く。花言葉は「早熟」。冬に花咲く寒木瓜もあるし、日本原産の「草木瓜」も存在する。

枝を切った時挿し木すると結構根付き、人に分けてやるのが趣味である。押し売りみたいなもので、上品な花なので元値は高いが、簡単に増やせるので、趣味の押し売りもできる。木瓜の名前の由来は、秋に実る果実が、あたかも瓜みたいな実が、同じバラ科のリンゴみたいに見事に実る。その実が瓜に似ているので木瓜が「もけ」となり、ぼけに転訛したとされる。

◎野村つつじとレンギョウ

毎年葉が出る前にピンクの野村つつじが満開となり、同時にレンギョウが真っ黄色に咲き乱れる。私は春を待つ者の心をときめかせるために両者を並べて植え楽しんでる。来客に褒められるので、自慢の早春花である。

「真冬でも 風邪ひきや耳は セミ時雨」

「悪趣味か 木瓜好きついに 呆けがきた」

◎椿満開

妻は武士の家系とやらで、親がうるさく庭に椿は植えられなかった。花びらが散るのではなく、まるで、がっくりと首が落ちるような散り方をするので、妻の親から椿の栽培は固く禁じられていた。親もなくなら、不謹慎かもしれないが、先祖に詫びながら、美しい椿を買ってきて、私は植え始めた。今では4種。紅白咲き分けの名花を栽培。「月の輪」など大木になってしまった。

◎これから咲く花

何と言っても旱月である。一時は200鉢もあつたのに今は何と5鉢のみ。47年もやつているので太いのはビールびん並みの太きになった。次は牡丹「島錦」など、超美麗華。クレマチス。日本ラン。梅花ウツギ・山法師も素晴らしい花である。梅（思いのまま）は3月に終わつたが遅いのは金木犀・山茶花等である。花に囲まれた人生もまた楽しからずや。

（早春雑感 その二）

◎アスパラガスは家族に笑顔

17年の春、アスパラガスの苗10株を友人から分けて頂いた。17年、18年は勿論一本も収穫はしなかった。株は大分充実したので19年4月桜が咲き始めた頃を、適期とみて初めて収穫。自慢話めくが、その美味しさは筆舌に尽くしがたい素晴らしさ。素敵な甘さがある。栽培法で別に特技があるわけではない。恐らく単に新鮮であるという事だけであろう。もし土地がなければプランターでも結構、3株もあれば、結構数回のおかずにはなる。工夫次第で笑顔。

ナス・キュウリ・枝豆・そら豆など他人に分けてあげるが、特別に美味しいと評判である。確かに枝豆など、茹でる湯を沸かしてから収穫しろ!!とさえ言われるのだから、如何に新鮮さが重要かがわかる。有名産地より、自宅産が遙かにおいしい。私の好きな食べ方は、アスパラガスを、ベークンで巻いて焼く。

家庭菜園6年目である。抗がん剤投与の為、白血球が正常値の3分の1と来ては、土壌に細菌が多いため、敗血症の可能性があるので、畑はドクターストップ。しかしいくら禁じられても、万

全の準備の下、収穫位は出入りしないわけにはゆかない。マスク、手袋、眼鏡、うがい、手洗いを確実に実行。許してたもれ。それが生きがいなのだ。喜びは生理的にも体に良い筈。がん対策は、あれもダメ、これもダメでは患者は精神的に参ってしまふ。この上もない趣味なら、がん対策は程よい程度なら許されるべきだ。がん対策に限らず、物事は全てトータルで考えるべきと私は信じる。癌などに負けてたまるか。

◎ウドも絶品

アスパラガスと同じ人から独活（ウド）も同時に苗をいただき、17〜18年度は育苗期間。19年度に、軟白栽培（白い部分直径3cm長さ約30cm）した若芽を、塩コショウで炒めて食べた。若芽は芳香があり、なんとも言えない美味しさに満ちていた。多少のえぐみがあり、それがまた最高に素晴らしい。私が酒飲みならあんなおいしい酒の肴はなかるうと思う。何の病害虫もない。肥料やるだけで放つたらかし。ウコギ科の多年草2〜3ぐらゐ。根は生薬で発汗・解熱剤。「独活の太木」は、全く別の品種の話。

◎ハンバーガーの包み紙

外国人から見たら、ハンバーガーを食べるとき、日本人の包み紙に包んだまま食べる仕草が、真に不思議でならないらしい。NHKの取材によると、なるほどほとんどの外国人は、ハンバーガーの包み紙は、ぼいと捨てて、そのまま指でつかみ、大きく口を開けてがぶりとやっている。彼らの感想を聞くと、せつかくおいしい汁が指に流れってきたのを、ペロリと舐める幸せを日本人はミス逸している。あの指をなめる仕草がたまらならしい。一方、日本人に聞いてみると、汚れた指をなめるなど不衛生で、たまつたもんじやない。

どんな強勢をされようが、あんなことを真似るなどできはしない。食べた後、すぐ手を洗えるとは限らない。スマホに油がつき、我慢ができない。と。同じ仕草でも、習慣の違いとはこんなに差があるものか。

◎電話の切り方

同じくNHKの取材によると、電話が終了した後、普通の日本人は、電話を切るのに必ず間を置く。計測するとおよそ終わってから7秒間ぐらい間をおいてから、厳かに受話器を置く。喧嘩でもした後なら例外であるが、親しい電話や頼み事などこちらから相手に敬意を払う立場なら、直さから電話を切るのに多くの時間を要する傾向がある。とのこと。云われてみると、なるほどそんな傾向があるかもしれない。これも外国人を例にとれば、通話終了後は、何のためらいもなく直ぐガチャンが常識との事。習慣の違いとはこうも違うものかと驚かされる。

◎お礼の言葉

私が中米で仕事をしていた時、JICAから予備知識として教育を受けた。其の時の注意書きに、現地の人に何か物をいただいた時、後で「この間は本当にありがとうございました」とお礼を言つてはいけない。こちらはお礼のつもりでも、相手は、美味しかったから、再び頂戴と催促していると受け取られるからだ。日本の常識とはまるで異なるから注意。との事。

◎日本人は口臭が多い。

高齢の日本人は割とハグなどの挨拶は少ないため、感じないかもしれないが、口臭が多いと外国人は言う。ハグすれば疑似キスをするから、口臭が有れば、敏感に相手は感じ取る。口臭の原因は大方歯周病である。誰でも歯は磨くが、歯周病に

気を付けた念入りの歯磨きはやらない人が多い。この話があつて以来、私は歯間ブラシで念入りに磨いているので妻は驚いている。

◎活魚の大量輸送革命

日本には、こんな頭の良い人がいるものかと思ひみじみ感心。正解は文末に。それは高級魚を、遠距離短時間で、安全に大量に、しかも安価で生きたまま運送できるシステムの開発である。

企業秘密で細かい事はわからないが、いわば鶏のバタリー鶏舎を、小屋丸ごと輸送するシステムである。簡単にいうと、金網の中に魚を生きたまま閉じ込め、大きな水槽で、運ぶシステムである。例えば30〜50kgのマグロの輸送を考えよう。

金網のサイズは、幅30cm長さ50cmを2個。高さ30cmの矩形立方体を更に斜めに傾けて3角形の個室2個作る。これが基本で、後はこの数を取り扱いやすいように増減する。例えば幅90cm×長さ1.5m(50cmが2つ)×高さ30cmを中敷居。即ち、1.2m幅である。これを基礎単位とし、

後はどれだけ数を増やすか。例えば水槽の大きさは1.2m幅で、魚体重量480kg。水量も同じ。金網など重量1.2kgとすればほぼ1.2t。例えば、40kgのマグロ120匹を生きたまま運ぶのに10トントラック1台必要。青森東京間、800kmを10時間。現在どんな輸送法か知らないが、恐らくこの方法は最高に優れたシステムかと思われる。さてそれでは40kgのマグロを生きたままの輸送システムの種明かしは、水槽の水分の2酸化炭素(CO₂)の含有濃度を一定濃度(企業秘密)の高さに保持すると魚は深い眠りに陥る。覚醒はCO₂濃度を下げ(0, 0.4%)、酸素濃度(21%)を上げると魚は元気に戻る。間仕切りの理由は魚同士の衝突・喧嘩による、荷痛みを防ぐ為の個室化。こ

れは最高級の発明。後はこのシステムの特許を盗まれない事。隣国は特許窃盗常習犯ゆえ。用心用心。



【特別企画】

打田升三の平家物語

巻第十一 (一・二)

八島院宣(やしまいんせん)のこと

「院宣」とは、上皇(法皇)の側近に仕える者が、君主の意向を受けて自分名義で出す文書のことである。前章段に記された経緯により「皇位の象徴である『三種の神器』を返還しなさい」と書いた手紙を持った平三左衛門重国に、宮廷の召次役である花方と言う者が付いて平家が疎開している屋島にやって来た。此の花方は現地で酷い目に遭わされる。国家の存立に関わる任務なのに、使者は半端な借金取り立てのような顔触れなのが気になる。其れでも平家側は法皇の使いと言うので首脳部が集まって院宣を開いて見た。小難しい言葉を使っているが次のような言い分である。

「一人聖体(安徳天皇)が宮殿を去られ諸国を放浪されて久しい。其の為に皇位の象徴である三種の神器が南海・四国に埋もれて数年になる。国家として

朝廷としては是ほど嘆かわしい事は無い。其れについて現在、京都に囚われている平重衡公は東大寺を焼いた逆臣であり、鎌倉の源頼朝は早く死罪にしろ!と迫っている。然しながら本人にしてみれば一族に離れて死罪を待つ、というのは誠に心細いことである。そこで提案をするのだが、平家が三種の神器を返還するのであれば重衡公の罪を許し釈放する準備がある。此の事を良く考えて欲しい:その様に法皇が仰せである。

寿永三年二月十四日 大膳大夫成忠が承る平大納言(宗盛)殿へ」と書かれていた。

大膳大夫は従四位の職で、成忠は桓武平氏では無い平氏であり、後白河法皇の側近として知られた平信業の子である。中途半端であるが、此の章段は是で終わる。次の章段で平家は都合の良い後白河法皇の提案を検討することになる。

請文(うけづみ)のこと

「三種の神器」を返還することは皇位を放棄することになり、安徳天皇を擁する平家が単なる流浪者になってしまうことである。とても承知は出来ないと思うのだが:法皇の指示に基づいて遣わされた手紙であるから平家側では宛名に記された内大臣(宗盛)と大納言(平時忠)とが是を受け取った。二位(重衡の母)には、重衡の手紙が別に届けられた。それには法皇の圧力で作文させられたことが明白な文言で「重衡の無事な姿を見なければ、神器返還のことを内大臣殿によくよく申し上げてください。そうでなければ生きて此の世でお目に掛かることは出来ません」と書かれていた。是を見て二位は何も言うことが出来ず手紙を懐中に入れ、その場に伏せてしまった。その心の中を推し量ると誠に哀れなことであ

る。

平家陣営では宗盛、時忠を始めとする首脳部が集まり法皇からの要求に対する対策を検討することになった。二位の尼は重衡からの手紙を顔に押し当て、人々が並んでいる後方の障子を開けて宗盛の前に倒れ伏し涙ながらに申し入れた。

「：あの重衡が都から手紙で言ってきたことの痛ましいことよ。心の中はどれ程辛かったことか。どうか私に免じて（法皇の要求に従い）神器を返還して貰いたい。」是に対して宗盛は「私も出来るならば其の様にしたいのですが、（平家に対する）世間の評判・批判も有り、また鎌倉の頼朝に見下されるのも悔しいことです。何よりも天皇が皇位を保って居られる（平家が存続してられるのは神器を保持していればこそ可能なことです。それを考えると親が子を助けたいという気持ちも抑えなければならぬ場合もあります。中将（重衡）一人のために平家一門の他の者たちを犠牲にすることは出来ません：」

宗盛の立場では其の様に答えるしか無いとは思いますが二位の尼は落胆した。平家物語には書いて無いけれども、宗盛は「二位の子では無かったとする説もある。重衡は確実に二位の子であったろう。」

「私も入道殿に先立たれた後は直ぐに後を追うつもりでしたが、幼い安徳天皇が此の様に放浪生活で苦勞されるのを見るにつけても平家一門の再起を夢見て今迄生き長らえてきました。此の度、中将（重衡）が一の谷で捕らえられたと聞いた後は、心ここに有らず、如何にしても今一度、逢いたいと思っっているのですが夢にも見ることが出来ないで（何か有ったのかと）胸が一杯になって湯水も喉を通らずに居ます。今、此の手紙を見てからは悲しい思いを晴らす手段も有りません。中将（重衡）が生きられないならば私

も同じ道（死出の旅）に赴こうと思っっています。私に辛い思いをさせるのであれば、生命を絶つてください。」と泣き叫んでいたのも、本当に其の様に考えているのであろうと気の毒に思えて、人々は涙を流し、誰も二位のことを正視できなかった。

二位の尼の嘆きは気の独ながら、集団としての平家は対策を検討しなければならぬ。其の席で重衡の同母兄と思われる中納言知盛が、先ず意見を述べた。「：どう考えても、三種の神器を返したところで（あの法皇や源氏が）重衡を釈放するとは思われない。此処は遠慮なく其の事を言つて要求を拒否するしか無いでしょう：」是に対して他の連中も有効な意見が有る訳ではないので只々「そうだ、そうだ」と賛成をして其の様に法皇の申し出を拒否する返事が出されることになった。

二位の尼も涙ながらに重衡宛の返事を書いたのだが涙が先立つて文字が乱れたけれども、子を思う母心で細々としたことを書いて重国に託した。重衡の正室である大納言佐（だいなごんのすけ）は泣くばかりで手紙が書けず、誠に心中は気の毒である。託された重国も同情して貰い泣きの状態で退出したのだが、此の時に平大納言時忠（二位の尼の兄）は、法皇の使者に随行していた召次役の花方に「其の方が花方か？」と尋ねた。「左様でございます」と答えると「法皇のお使いで波路を凌ぎ遠くまで来たのだから思い出を残してあげよう」と言つて花方の顔（額）に波形の焼き印を付けた。残酷な人物である。都に戻つてから後白河法皇が其の傷を見て「仕方がない。今日から名前を波形と替えて奉公せよ」と言つて笑つたと言ふ。これも法皇どころか人間として最低な奴である。気の毒にも使者が酷い目に逢つた交渉で平家が法皇に出した回答（提案を拒否する）の内容は次のような趣旨であった。

『今月十四日に出された院宣を携えた使者は同二十八日、讃岐国屋島に到来した。謹んで承るべき所であるが、当方で検討をした結果、次の様に回答をする。』

平家としては通盛以下、多くの者を摂津国一の谷の合戦で失っている。それを思えば、重衡一人が赦されることを喜んでもいられない。

我ら平家が戴く安徳天皇は、今は亡き高倉天皇から譲位されて既に四年、堯舜の古風（古代中国の名君）に倣うところの理想的な政治を目指していたところ、東夷北敵（木曾義仲と源頼朝の軍勢）が群をなして都に乱入して来た。是により幼帝・母后のお嘆きは深く、外戚・近臣の憤りと憂慮が深かつた為に暫くは九州に遷幸を余儀なくされたのである。其の様なことであるから、安徳天皇が安心して無事に京都へ戻る事が出来るまでは三種の神器が天皇の側から離れることは無い。

臣は君をもつて心とし、君は臣をもつて体とすと言ふ。君安ければ、すなわち臣安く、臣安ければ、すなわち国安し。君上に憂うれば、臣下に樂しまず。心中に愁いあれば、体外に悦無し。

（我が平家は、始祖・平将軍貞盛が相馬小次郎将門を討つてから、東八か国を鎮めて子々孫々に伝え、朝敵を誅罰して代々、世々に至るまで皇室の聖運を守護して来た。すなわち亡父・故太政大臣は保元・平治両度の合戦に勅命を重んじ、自分の生命を軽んじて戦つた。）

特に彼の源頼朝は、平治元年十二月、父親・左馬頭義朝の謀叛に連座して既に誅罰されることを故入道相国（清盛）の慈悲により特に赦された者である。それなのに昔の恩を忘れ好意を思わず流人の身をもつて濫りに蜂起して争乱を成した。その行動は愚かしい限りであり、神々から天罰を受け、密かに業績

を消されるべき人物である。

日月は一物の為に其の明らかなることを暗くせず、明王は一人の為に其の法を曲げず（賢明な王は一人だけの為に法は曲げない）一悪をもつて其の善を捨てず、と言う。小瑕（しょうか）＝小さな罪をもつて其の功を覆う事が無いように願う。

当平家は数代に亘り朝廷に御奉公をしており特に亡父・清盛の忠節をお忘れでなければ法皇が平家の居る四国に來られるのが筋だと考える。そうすれば平家は、もう一度反撃して京都に戻る決意である。それなのに使者を以て院宣だけで国家の大事を平家に命じられるのは納得できることでは無い。反撃が叶わなければ平家は喜界が島から朝鮮半島、中国大陸にまで渡るつもりである。もし、そうなれば悲しいことだが人皇八十一代で皇位の象徴は遠く異国の宝になってしまふ。法皇取り巻きの諸公は、其の事を良く考えた上で法皇に奏上して頂きたい。

寿永三年二月二十八日 従一位平朝臣宗盛の回答』
—この様に書かれていた。最初から無理な注文ではあったが、使者への暴行と言い、自分の立場が理解出来ない平家は兇暴な強気である。

戒文（かいもん）のこと

合戦に負け続けている割には強気な平家は後白河法皇の提案を拒否した。取引の材料にされた平重衡は「…やはりそうであろう…皇位の証拠である神器と、此の身との交換が成り立つ筈もない。そうなる和平家一門の人々は私の行動を不都合なことと思つていてに違いない！」と後悔をしたけれども、捕虜の身ではどうしようもない。

その中に重衡の身柄は源頼朝の居る関東へ護送されることになった。全ての希望が絶たれた今は心細く

住み慣れた都を離れるのも辛い。源氏に捕らわれて天にも運にも平家一門にも法皇にも見放された平重衡が頼るところは神仏しか無い。当時は神様の勢力が弱かったから高僧經由で仏様に頼（すが）るようになる。その為には覚悟の程を示す必要があり俗世を捨てた証拠として僧侶の姿にならなければ信じては貰えないであろう。

重衡は土井次郎実平を呼んで「出家をしたい」と申し出た。実平は是を義経に伝えたが理髪店に行くのと違つて髪の毛だけでは済まないから法皇の意見も聞いた。「王」と名乗るからには其のぐらゐの決定権は有ると思うが、法皇も頼朝を恐れて「鎌倉に連行してから決めて貰え！」と言つた。結局、仏門に入る許しは貰えず重衡は「それならば日頃から師弟の約束を結んでいる聖人に面会して来世のことを教えて貰うことは出来ないか？」と言えば、実平は「其の聖人の名は？」と問う。

重衡が「黒谷の法然房と申すお方です」と答えると実平は「それならば宜しいでしょう」と許してくれた。平家物語原本には触れていないが、法然房は、比叡山延暦寺第三代座主である慈覚大師（円仁）が唐留学で学んだ浄土教を継承して専修念仏を唱導した浄土宗開祖・法然のことである。

重衡は大いに喜んで法然房を呼んで貰い涙ながらに懺悔をした。「…此の度の合戦で生きながら捕らわれたことは聖人にお目にかかれる宿縁であつたのでしよう…お伺いしたいのは、私が後生（死後の世界）で如何にすべきか？という事です。

今にして思えば、此の身が榮華に包まれていた頃には御所への出仕に取りまぎれ、政務に煩わされ、奢り高ぶる心に支配されていて、来世のことなど考へたことも有りません。さらに宗家の運が尽き、世の中が乱れてからは此処に戦い、かしの争い、他

人を滅ぼし、自分の身は助かるうと思ふ悪心だけが心を支配していて善心は起こらず、

南都（奈良）の諸寺を焼き滅ぼしてしまつたことは、天皇の御命令を受けた平家による反乱鎮圧の戦いの出来事とは言つても、武将として合戦の責任は逃れることが出来ません。特に私は南都攻めの大將軍でしたから全ての責任を負う立場にあり、此の様に人知れず生き恥を晒す事になりました。

今は髪を剃り戒を保ちなどして仏道修行を致したく思つておりますが、此の様な囚われの身となりましては何事も自分の思う様には出来ません。今日、明日とも知れぬ身の行方ですが、どの様に修行をして業を免れることが出来るのか分からないことが残念に思われます。自分の一生を思う時に罪業は須彌山（しゆみせん）＝仏教世界の中心に立つ山よりも高く、善業は微細な塵ほども積んでおりません。この仮で虚しく命を終わつたならば地獄で火穴湯（かけつとう）＝猛火で焼かれるの苦しみを受けることになるでしょう。願わくば上人の御慈悲をもつて、哀れみを垂れさせ給い、私の様な悪人でも救われる方法手段が有るならば教えてください…」

是を聞いた法然房は何とも気の毒で涙に咽び即答で返事をする事が出来なかつたが、暫くしてから次のように答えた。「折角、人間として生まれながら、それを活かせず虚しく悪業により地獄に落ちることは悲しんでも余りあることです。その中で貴方は今、煩惱に穢れた現世を嫌い、浄土を希求する心を持つて悪心を捨て善心を起こされました。過去、現在、未来の諸仏が是を喜んでおられます。その事の為に迷いの道を捨てて仏門に入る手段は幾つもありすが、現在の様に仏法が衰え、世の中が濁り乱れた時代には念仏を唱えることが最も良いとされています。

志すところの浄土（あの世）は往生する者の本来に応じて九品に分けられますが、仏道修行を六字に集約した南無阿弥陀仏は如何なる者（愚かて道理が分らない者でも唱えることができます。是に依り罪が深くとも卑下することなく念仏往生が出来るのです。功德が少ない者でも望みを捨ててはいけません。

念仏は一度唱え、また十度唱えれば阿弥陀如来があの世から迎えに来てくれますし、雑念を交えずに「専称名号至西方」と経文の意味を解釈して「たす」ら名号を唱えれば無事に？西方に至ることが出来ます。また「念々称名常懺悔」と述べて、念入りに弥陀の名を唱えれば懺悔と同じ効果があります。冥土への途中で困った時には「利剣即是弥陀号」と頼めば魔物などに邪魔をされませんし、更に「一声称念罪皆除」と念ずれば、罪は除かれるとされています——是まで申し述べたことは浄土宗の極意ですが、死後に極楽浄土に行けるかどうかは、信心の有無に依るのです。只々、深く信じて夢々疑わず、浄土宗の教えを守り、日常の起居動作に場所や時間や都合を選ばず、三業四威儀（さんこうしいぎしんぎ・口・意の諸行と行住座臥における起居動作）に於いて「心念口称（しんねんくしよう）」心中に弥陀の称号を唱えること」を忘れなければ臨終の時を契機として此の苦域の界苦しみの多い現世からの離脱を図り、極楽浄土に往生されることは疑い有りません…

教化を受けた重衡は大いに喜んで「この様な教えを頂いたからには戒律を受けて頂き、其れを守りたいと思えますが（其の為には）出家をしなければならぬいでしょうか？」と質問した。法然房は「出家をしなくても（僧にならなくても）戒を保つことは珍しくありません」と答え、重衡の額（ひたい）に剃刀を当てて、髪を剃る真似だけをしてから仏道修行者が守るべき十箇条の戒律（不殺生、不偷盜、不淫、不妄語、不飲酒、

不塗飾香鬘、不歌舞視聽、不坐高広大牀、不非時食、不畜金銀寶）を受けた。小難しく述べているが、殺生はしない、罪は犯さない、淫らな行為はしない、嘘はつかない、酒は飲まない、贅沢はしない、間食はしない、金は貯め無いなどであるから、偉い坊さんに言われるまでも無く現代の一般国民はそう言う暮らししか出来ない。法然房から言われた平重衡は感激の涙を流した…と原本に書いてあるから、余程、贅沢な暮らしをしていたのであろう。

現代ならば誰にでも言える話を偉い坊さんにして貰った平重衡は現金を持っていないので、お布施代わりとして常に見舞いに来ていた武士に預けてあった硯（すずり）を取り寄せて法然房に与え「是は他の者に譲ること無く、常に上人の居られる場所に置いて下さい。そして、是が重衡の持ち物であったなど、思い出される度に念仏を唱えて下さい。偶には経の一卷でも御廻向頂ければ有難く存じます…」などと、涙ながらに申し上げた。

其処まで言われると、浄土宗開祖・法然上人も気の毒さが先立つて慰めの言葉も掛けられない。お布施がわりの硯を懐にしまい、墨染の衣の袖を同情の涙で濡らしながら帰るほかはない。此の硯は重衡の父・清盛入道が中国（宋）の王に多くの砂金を献上し、その返礼として宋から贈られたもので「日本和田の平大相国のもとへ」と箱書きされていたという。硯でも「松陰」という立派な名が付いていたらしいから庶民よりも偉い、此の後、平重衡は源頼朝の要請で関東へ護送されることになる。源平盛衰記には馬に乗せられたように書いてあるが囚人であるから監視付であり鎌倉までの道中は長い。重衡本人は、法然上人のお蔭で何が起きてても覚悟は出来ている筈なので心配はいらないとは思いますが、鎌倉に行っても命の保証は無い。

海道下（かいどうくだり）のこと

その頃、合戦のことは義経らに任せて鎌倉に居た源頼朝は、どういう理由か一の谷で捕らえた重衡に会ってみたいと言いついたのである。後白河法皇が密かに画策した「三種の神器」との交換に法皇側の駒として利用されかけた人物に興味を抱いたのか、或いは平家の中で平知盛と並んで貴族武士らしい人物と評価したのか。頼山陽の「日本外史」では「請文」の章段にあるように平家側が後白河法皇の使者の鼻を切った報復として重盛を誅したいのだが、自分では実行せずに頼朝に殺害させる目的で鎌倉へ送ったことになっている。それが事実ならば法皇は鳳凰でも孔雀でも無くなるから、頼朝の希望が真実に近いかも知れない。

航空便も新幹線も無い昔は、京都から鎌倉へ来るだけでも大変なのに大物の囚人を護送するのは大事業になる。先ず重衡は土肥実平の監視下から九郎義経の宿所に移送され、寿永三年三月十日に梶原平三景時が連行する形で鎌倉へ移送された。平家は西に居るのに、自分は捕虜として東に送られる…その心中を察すると誠に哀れである。

囚人護送の一行は京都山科の四宮河原にさしかかった。此処は逢坂の関に近く山風の強い所であるから昔、第六十代・醍醐天皇の第四皇子とされるが実際に素性が不明な盲目の歌人・蟬丸の歌で続古今集に収録された一首

逢坂の関（関所）の嵐のはげしきに

しい（強い）てぞいたる世を過ぎんとて
が思い出される。それは蟬丸が琵琶を奏した時に醍醐源氏の博雅の三位（母親は藤原時平の娘）が風の日も雨の夜も、三年に亘り通い続けて伝授を受け、琵琶

の秘曲とされる三つの曲を伝えた…という今昔物語の話である。

一行は更に山城国と近江国の境になる相坂山を越え、琵琶湖に架かる瀬田の唐橋を渡り、草津の野路の里から鏡山、さらに琵琶湖西岸の比良山地を遠く見ながら伊吹山地に近づいた。囚人であるからゆづくりと観光は出来ないけれども新古今集に…人住まぬ不破の関屋の板庇(いたびきし)荒れにし後はただ秋の風…と詠まれた日本三関の一つを抜けて、現在では名古屋市に入る鳴海(伊勢湾の入江)に達した。此処では在原業平が「唐衣(からころも)きつつなれにし…」と歌を詠んだ景色を見ながら三河国の八橋(知立)に來た。

此処は水の流れが蜘蛛の手足のよう多方向に交錯して居て幾つもの橋が掛けられている。囚人の重衡には、それが身動きの出来ない自分の運命のように感じられて気分がふさがる。浜名湖に達して架けられた橋を渡れば松の梢に風が鳴って入江の波の音と共に不安をつのらせる。

一行は池田の宿(静岡豊田付近)に到着して重衡は宿場の長者屋敷に入れられた。長者の名は熊野(ゆぎ)と言う女性で此の地域の支配者でもあった。熊野に侍従と呼ぶ娘が居り、其の夜、侍従は重衡に付けられた。重衡を見た侍従は「昔(平家全盛時代)には、お目に掛かることさえ出来なかつたのに、今はこうして目の前に御出でになることが不思議でならない…」と言ひ歌を詠んだ。

旅の空はにうの小屋のいぶせきに
ふるさと如何に恋しがるらむ
是に対して三位中将重衡の返歌は、

故郷も恋しくもなし旅の空

都もついのすみかならねば

そして侍従の歌に感心した重衡は梶原景時に聞い

た。「この様な土地に居て、是ほどの歌を詠む此の女性は何者なのであろうか？」景時は畏まって「重衡公は御存じ有りませんでしたか？あのお方こそ八島の大臣(平家盛)殿が当国(遠江国)の国守で有られた時に召されて御寵愛が深かつた女性です。都に連れて行かれたのですが、此の地に老母を残していたので其れが心配で三月の初めに
いかにせむみやこの春も惜しけれど

慣れし吾妻の花や散るらむ

と詠んで(宗盛公から)お暇を頂いた東海道随一の歌の名人と称された女性です」と答えた。梶原景時は源頼朝を石橋山中で助ける(見逃がす)までは平家に仕えていたから事情を知っていたのである。それはそれとして平重衡は鎌倉へ送致される捕虜であるから翌日には池田宿を去って行く。

三月十日に都を發つて、数えて見れば三月も半ばを過ぎ春も終わろうとしている。遠山に残る花は残雪のように見えて、過ぎ行く海岸や遠くの島も春霞に包まれている。囚人の重衡は過去を想い行く末を案じるにつけても「是は如何なる宿業の報いであろうか！」と涙にくれるばかりである。

重衡には子供が無かつた。母親の二位殿もそれを残念に思い、北の方(天納言佐殿)も本意な思いでかねてから神仏に祈っていたのだが、其の甲斐は無かつた。それが捕らわれの身になってみると「子が無くて良かった！もし子が居たらば嘆きも大きかつたで有ろう…」と思ひ直すようになったのは、よくよくのことである。

一行は歌枕で知られた小夜の中山(掛川市北方)に差しかかつた。新古今集にある西行法師の歌…
年たけてまた越ゆべしと思いきや

命なりけり小夜の中山

が思い出されて重衡は自分でも「また越えることは

出来ない」と着衣の袂(たもと)を濡らした。歌枕にある静岡市西南部、宇都の山辺の蕨の道を心細くも越えて安倍川西岸の手越を過ぎれば北の方角に遠く雪に覆われた山が見えた。名を問えば「甲斐の白根山」とのこと、目的地が近いことを感じた重衡は落ちる涙を抑えて詠んだ。
惜しからぬ命なれども今日までぞ

つれなき甲斐の白根をも見つ

鎌倉で斬られるかも知れない運命なのである。現在の興津付近に在った清見が関を越えて富士山麓地域に入ると北には険しい山々が聳え、松林を淋しく風が吹き抜ける。南には大海原が遠く何処までも広がって、岸打つ波も激しい。さらに「♪恋すれば瘦せる筈だが(瘦せていないのは)私を恋しく思っていないからか？」と歌われた明神伝説の残る足柄山を越えて、こゆるぎの森(大磯海岸)、まりこ河(酒匂川)、小磯・大磯の浦、八松(やまつ)辻堂付近、とがみが原(鶴沼)、御輿が崎(稲村が崎)の海岸部を回れば目的地は近い。急ぐ旅では無かつたが日数が重なって一行は頼朝が待つ鎌倉へ到着したのである。
どちらが真実かは決めようが無いけれども源平盛衰記では、頼朝が伊豆で狩りをしていたので重衡も一旦は伊豆の国府に連行されたことになっている。そこで温泉にでも入れてサッパリしてから対面するほうが人間らしい話になる。平重衡は鎌倉で斬られた訳ではない。(続く)

編集事務局 〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>